

の育てられた家庭や学校に人間的配慮の欠けていたことを憤る。小学校では国語の時間だけではなく折にふれ母国語をもっときめ細かく指導すべきで、それが担任教師の仕事ではなからうか。また、幼児期に、母親（又はそれに代わるべき人）は毎日子供達に本を読んで聞かせてやったのだろうか。TVに子守りをさせたり、逆に母親自身TVを楽しむために就寝前の子供に落ちついて本を読んでやらない親が増えてきたといわれるが……。聞いてみると、案の定わが家に入出入りする「落ちこぼれっ子」達も殆んどがこの読み聞かせの経験に乏しく、本に対する興味が持てぬまゝに今日に至ってしまったようである。落ちこぼれ防止のための手立てはいろいろ考えられるが、読書の果す役割

はかなり大きいと思う。読み聞かせから次第に本に対する興味を持ち始める時期は多くの場合、小学校入学前後であろう。「落ちこぼすのは学校だ。」とよく言われるが、このようなことから、幼時における家庭でのほんの一寸した配慮が大切だと思う。しかし、これは私が教師をしているから教師としての言い訳なのだろうか、落ちこぼれはやはり学校だけに責任があるのだろうか。

今年もまた一人の「落ちこぼれっ子」と共に過ごし、教師としていろいろ考えさせられることが多く、自分にとっても教育について勉強する良い機会だと思う此の頃である。

(3回生 三輪田学園講師)

思いつくまま

鈴木純子

お恥しいことに、学生時代にはほとんど図書館というものに縁なく過してしまった私が、国立国会図書館に勤めるようになって、昨春で20年になりました（卒業後1年間司書養成機関に通ったので、卒業年度と1年のズレがあります）。

図書館利用の経験は乏しいながら、本は好きだし、どちらかといえば女性むきの仕事に見える、教師になるのはいささか重荷等々考え合わせての、お世辞にも積極的、意欲的とはいえない選択だったように思いますが、共働き、子持ちの先輩たちに恵まれ、同じようなコースをとって、いつの間にか日が経ったという感じです。20年前といえば、今在学中の方々が赤ちゃんの頃というわけです。と書いて、日頃はなるがままにまかせてあまり意識しないでいる馬令を改めて目前につきつけられた感があり、がく然としております。

20年前には、図書館といえば勉強部屋代りに使う学生の行列が話題になる程度、一般的なイメージとしては、何やらカビ臭い紙魚の巣といったところだったように思いますが、ちょうどその頃から、中小地域単位の公共図書館の、館外貸出しを中心にした活動が活発となり、イメージチェンジ

がかなり進みました。

皆様やお子様方の中にも、居住地域の図書館を利用しておいでの方が、今では多いのではないのでしょうか。

図書館といえばこの他、学校図書館、大学図書館、研究機関や企業内の専門図書館などさまざまな館種がありますが、私の勤める国立国会図書館は、現在のところ、日本にただ一つの国立図書館であり、その規模や果すべき役割の多岐にわたっている点で、特異な存在といえましょう。

私は現在、「地図室」という所で仕事をしていますが、ここは、この図書館に大量に入って来る図書・雑誌の受入、整理、閲覧という大きな本流から派生する小さな一水脈とでも申せましょうか。大学で地理を勉強した？ことが、仕事の上でどれだけ役立っているか、まことに心もとない限りですが、傍系の小人数のセクションのため、仕事も巨大な歯車の一部という感じはあまりせず、よい職場だと思っています。もちろん、小人数ゆえの拘束もないわけではありませんが。

人によっては、「図書館には地図もあるの？」といわれる位ですが、新旧、各地域、各縮尺のさ

さまざまな地図を求めて来館される方も多く、図書館、自分ともに力不足のため要望に応じ切れぬもどかしさを一方に背負いながら、目ざすものが見つかった喜びを利用者の方の顔に見る時は疲れを忘れます。

Map librarianshipという言葉は、日本語では何といったらよいのでしょうか。世界的にみると、議会図書館や英国図書館（いずれも莫大な地図のコレクションで著名）等々を擁するアメリカ、イギリスをさきがけとして、4、50年程前から、Map librarianship の研究、連絡組織が結成されはじめ、国際的な図書館協会の連合体である IFLA (Inter-national Federation of Library Ass-

ociations)にも、Geography and Map Libraries Sectionが置かれるなど、Map librarianshipなるものが確立されて来ています。日本はまだ残念ながら、そこまで到達できておりません。かく申す私も、こうした流れの中で何がしかの役割をになうことがかなうならというあせりにも似た気持がないわけではありませんし、地図そのものについても、勉強したいこと、しなければならぬことが山ほどありと、当分、生き甲斐？にこと欠くことはなさそうな毎日ですが、生来の怠け者ゆえ、いずれも初夢のうたかたと消え、しばんでしまいますかどうか……。

(9回生 国会図書館)

“染め”との出会い

中間 芙美子

30才も半ばをすぎると、残りの人生をどのように生きてゆこうかということ、若い時とは違った気持で再認識し、よし今ならまだ間に合うと自らを励まして進路の修正ができるそんな時期なのかも知れません。

私も、公務員という、共働きの諸条件が比較的整備されている職業で、働き続けること12年目、不規則な時間帯で仕事をする多くの夫を持ち、二人の子供の保育園送迎、家事雑用に追われ、忙しい毎日を送っていますが、ただ忙しいだけの日常では（忙という字は立心べんに亡うと書くように、心を失うということは忙しさの空しさを表わしている）、いつの間にか心を失う怖しさもあるように思い、下の子供がもうすぐ5才になる現在（子供を保育園育ちにすることについては、いろいろ不安もあり悩みましたが、母親が昼間一緒にいないことが、子供の心の傷になるのか、又は自立へ向かう心を育てる糧になるのか、それを分けるものは、子供を思いやる母親の愛情が子供にしっかり伝わっているかどうかであるということ、日々の体験を通して実感し、今までのところ比較的良好な関係を保っている）と自負しています）自分のライフワークとも言えるようなことをやりたいと

いう気持がジワジワと表出するようになりました。自分の気持に忠実に、決して背伸びをせずいたい自分は何が一番やりたいのか、ということ、時間をかけて心に問い続けてきた結果、職場での仕事が創造の喜びを味わうということからほど遠いためかも知れませんが、染色にたどりついたのです。そのためには生活上の様々な条件整備も必要となりましたが、今は、ちょっとした関係で知り合いとなり教えていただくことになった更紗染め（チャンチンという素朴な道具を使用してのろう描き＝パディック＝の細かい模様はむずかしく、根気がいり、仲々思うようにはいきませんが、インド更紗や、ジャワ更紗の美しさにはただ、ただ目をみはるばかりです）と、身近な草木を利用した植物染めにとり組んでいます。まっ白な布に思いの色を、思いのデザインを染めるということは本当に素晴らしいことです。そして、また、すすき、びわ、よもぎ、毒だみ、玉ネギ、刈安、梅、桜 etc. あらゆる植物が染料になるおどろきはまた格別です。染織家の志村ふくみさんの「それらの植物から染まる色は、単なる色ではなく、色の背後にある植物の生命が色をとおして映し出されているのではないかと思うようになりました」